慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾大学体育会ソッカー部員のエゴグラムについて
Sub Title	Regarding egoguramu of Keio university soccer team
Author	大嶽, 真人(Otake, Masato) 須田, 芳正(Suda, Yoshimasa) 依田, 珠江(Yoda, Tamae) 石手, 靖(Ishide, Yasushi) 古賀, 初(Koga, Hajime) 田中, 博史(Tanaka, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	2004
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.43, No.1 (2004. 1) ,p.33- 36
JaLC DOI	
Abstract	The EGOGRAM was used to objectively indicate the patterns of characters and behavior of Keio University Soccer players and these data were used to see the differences within the activities of the teams in 2002. The research was carried out in April and December 2002 using Tokyo University EGOGRAM New Ver. As a result, these following observations were made. season. 1. A team's EGOGRAM pattern showed the type of opposite N, and the change didn't show at the before season and after season. 2. B teamfs EGOGRAM pattern showed the type of FC-dominant, and the change didn't show at the before season and after season. 3. The student staff's EGOGRAM pattern before season showed NP-inferior, the pattern after season, the point of CP, NP, A, and FC went up, and FC became down.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00430001-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学体育会ソッカー部員のエゴグラムについて

大嶽　真人*　　須田　芳正*　　依田　珠江*
石手　　靖**　　古賀　　初***　　田中　博史***

Regarding EGOGRAM of Keio University Soccer Team

Masato OTAKE[1], Yoshimasa SUDA[1], Tamae YODA[1], Yasushi ISHIDE[2], Hajime KOGA[3], Hiroshi TANAKA[4]

The EGOGRAM was used to objectively indicate the patterns of characters and behavior of Keio University Soccer players and these data were used to see the differences within the activities of the teams in 2002. The research was carried out in April and December 2002 using Tokyo University EGOGRAM New Ver.

As a result, these following observations were made.

1. A team's EGOGRAM pattern showed the type of opposite N, and the change didn't show at the before season and after season.
2. B teamf's EGOGRAM pattern showed the type of FC-dominant, and the change didn't show at the before season and after season.
3. The student staff's EGOGRAM pattern before season showed NP-inferior, the pattern after season, the point of CP, NP, A, and FC went up, and FC became down.

Ⅰ．はじめに

スポーツにおいて高いパフォーマンスを発揮するためには，「心・技・体」といわれる精神力などの心理的要素と体力，技術などの身体的要素が調和していることが重要である。大学生スポーツ選手においては学業とスポーツを両立することが必須で，フィジカルコンディションの維持・向上とメンタルコンディションを良好な状態に保つことが特に重要であると考えられる。さらに大学や社会あるいは日常生活の中においても，自分の感情や気持ちをコントロールしていかなければならない。またチームが１年間のシーズンを戦うためには，各選手が同じ目標，目的意識，課題を遂行していくことが重要であり，そのためにはチームメイトの性格・行動パターンを理解して対人関係をスムーズにすることが重要であると考えられる。そのためには，自分の自我状態を認識し，自分の置かれている立場，行動，役割によって自我状態がどのような変動をするのか理解することが必要となる。そこで本研究では，慶應義塾大学体育会ソッカー部を対象に，性格・行動パターンを客観的な指標としてとらえるエゴグラムを用いて，体育会学生のエゴグラムの変化の有無および競技力向上を目指す体育会に所属することでどのような変化が見られるのか調査し，指導のための基礎的資料にすることを目的とした。

*慶應義塾大学体育研究所助手
**慶應義塾大学体育研究所専任講師
***東京電機大学
****大東文化大学

1) Instructor, Institute of Physical Education, Keio University
2) Assistant professor, Institute of Physical Education, Keio Umiversity
3) Tokyo Denki University
4) DaitoBunka University

II．方法

1．調査対象

慶應義塾大学体育会ソッカー部員58名（1年生18名，2年生13名，3年生16名，4年生11名）。なお，妥当性尺度としての偏位尺度および疑問尺度の判定を採用と無回答の項目があるものについては，すでに除外したデータ数である。

2．調査時期

平成14年4月（シーズン前）と12月（シーズン後）に実施した。

3．調査内容

東京大学医学部心療内科（1993）によって開発された55問からなる東大式エゴグラム第2版検査用紙（以下TEGと記す）を用いた。また，フェイスシートとして，所属チーム（Aチーム・Bチーム・学生スタッフ），学年，ポジションなどを調査した。TEGは質問項目に対して，「はい」，「どちらでもない」，「いいえ」で答える。得点は「はい」に2点，「どちらでもない」に1点，「いいえ」に0点として，自我状態の尺度ごと得点を合計し，相対累積度数からパーセントタイル値を求め標準化スケールを用いて分析した。

自我状態には，「親の自分（Parent：P)」「大人の自分（Adult：A)」「子どもの自分（Child：C)」が存在する。さらに図1に示したように親の自分は「批判的な親（Critical Parent：CP)」と「養育的な親（Nurturing Parent:NP)」に，子どもの自分は「自由な子ども（Free Child：FC)」と「順応な子ども（Adapted Child：AC)に分かれ，5つの自我状態がある。

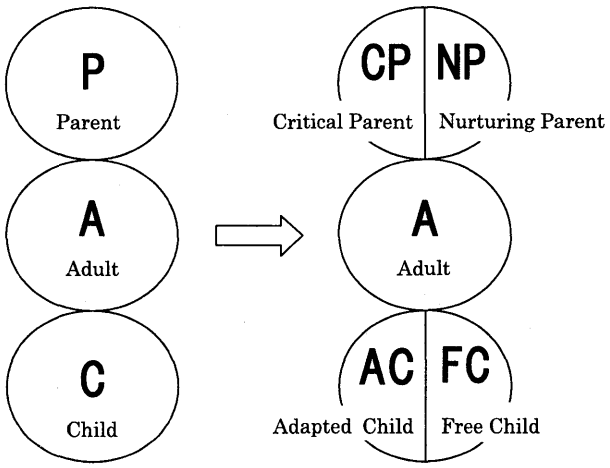

図1．自我状態

「批判的な親：CP」は，父親的な厳しい部分で，理想の追求，義務感，責任感などの肯定的側面と支配的，批判的といった否定的側面を持っている。

「養育的な親：NP」は，母親的なやさしい部分で，共感的，保護的，受容的で相手に幸福感，満足感を与える思いやりのある肯定的側面と過保護，過干渉，相手の自主性，独立性を抑制してしまう否定的側面を持っている。

「大人の自分：A」は，事実に基づいて物事を判断しようとする部分で，データを客観的に判断するような働きをし，情報を収集して冷静に計算し意思決定を行い判断する側面と機械的，打算的，冷徹という側面を持っている。

「自由な子ども：FC」は，親の影響をまったく受けていない，生まれながらの部分で，快感を求めて天真爛漫に振る舞い自由奔放で周囲に温かさや明るさを与えるが，否定的な側面として，自己中心でわがままになり，協調性に欠くことがある。

「順応な子ども：AC」は，周囲の期待に添うように常に気がねをして自由な感情を抑える「いい子」のような部分で，協調性，周囲に従順，慎重という側面と消極的で控え目で依存的という側面を持っている。

III．結果と考察

1．ソッカー部員のエゴグラムのパターンの変化について

図2に4月と12月に測定したエゴグラムのパターンを示した。

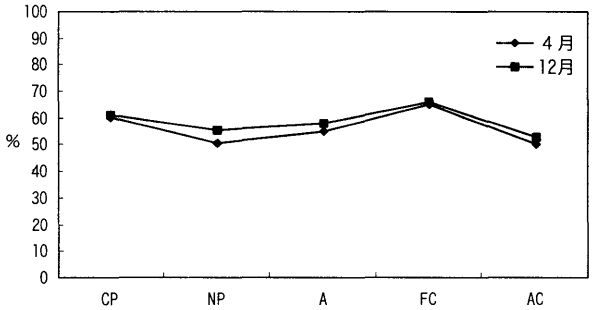

図2．ソッカー部員のエゴグラムについて

4月のエゴグラムのパターンではFCが高い傾向がみられた。FCが高い得点のパターンにおいて，東京大学心療内科TA研究グループが団体競技であるアイスホッケー選手を対象に行った研究ではFC優位のパターンが多かった（東京大学医学部心療内科1995）と述べており，団体競技であるサッカー選手を対象にした本研究も同様の結果を示した。12月のエゴグラムのパターンは4月の

測定時と同様にFCが高い得点のパターンであった。4月の測定と12月の測定ではほぼ同じパターンを示したことからシーズン前と後では変化がないことがわかった。

2．所属チーム別のエゴグラム・パターンの変化について

Aチームに所属する20人の得点を平均したエゴグラムのパターンを図3-1に示した。

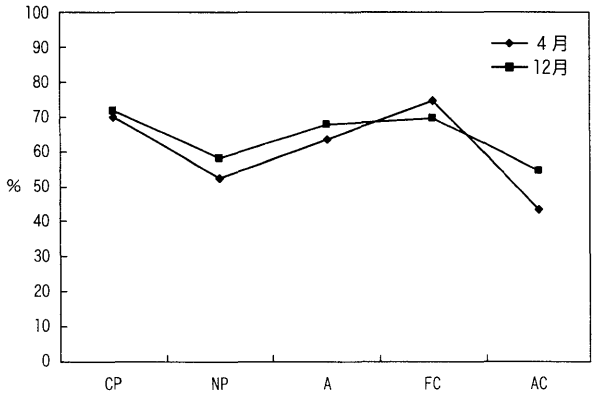

図3-1．Aチームのエゴグラム・パターン

4月および12月のエゴグラムのパターンを見るとほぼ同じで変化がみられない典型的な逆N字型であった。CPとFCが高くACが低いことが特徴であり，理想を追求する頑固な部分がかなり高く自己主張が強いと考えられるパターンである。岡村ら（1997）はチーム内の役割としてキャプテンを1シーズン過ごしたサッカー選手のエゴグラムのパターンにおいて，他人に対する思いやりが見られ，周りの人を引っ張れるようになったと述べているが変化が見られなかったことから，本学ソッカー部Aチームの選手は自分のプレーのことで精一杯で，他人に対する思いやることやリーダーシップを発揮することができる選手が少ないと考えられる。

次にBチームに所属する31人の得点を平均したエゴグラムのパターンを図3-2に示した。

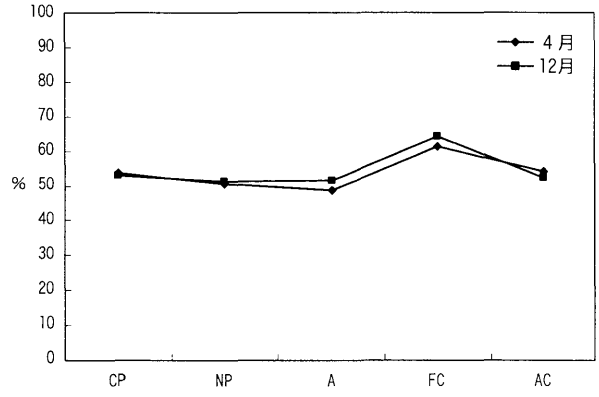

図3-2．Bチームのエゴグラム・パターン

4月および12月のエゴグラムのパターンを見るとほぼ同じで変化がみられないFC優位型であった。FCのみが高いのが特徴で，自由奔放で何事にも感覚的に処理をして，情緒的な判断に流されてしまう傾向が強く，自分を見つめることが苦手な自己中心的なパターンであると考えられる。滝山（1983）は4年間のレスリング部の経験において，性格プロフィールの変化を示さなかった選手は性格・情緒的側面の動揺幅が非常に大きく表れるタイプであったと述べている。このことより，本学ソッカー部Bチームの選手についても精神的に不安定で動揺幅が大きいことが考えられるため，選手の内面的・精神的側面を十分に考慮して指導していくこと重要であると考えられる。

学生スタッフ7人の得点を平均したエゴグラムのパターンを図3-3に示した。

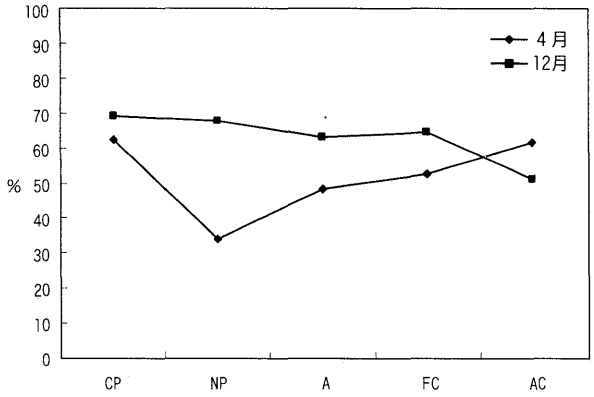

図3-3．スタッフのエゴグラム・パターン

4月のエゴグラムのパターンを見るとNP低位型であった。CPが高いことで批判的で不満を持っているにもかかわらず，高いACを示すことから，我慢したり妥協したりと自己主張できず，さらにNPのみが極端に低いことで思いやりに欠けてしまうことが特徴であると考えられるパターンである。しかし12月のエゴグラムのパターンを見るとAC以外の自我状態が上がり，4月のパターンよりもエネルギッシュに活動するようになったと考えられる。さらに周りへの思いやりも強くなり周囲からの信頼が得られ，リーダーシップを発揮するパターンに変化していることがわかった。

本研究ではソッカー部内の所属チーム単位で結果をまとめ考察を行った。エゴグラムが持つ本来の性質では各個人がどのエゴグラムパターンを示すのかを調査するものであるが，本研究は慶應義塾大学体育会ソッカー部が初めて行うエゴグラムのパターン調査で調査対象者が少ないため，群の特性が顕著に見られたため所属チームにおける変化をみるにとどまった。今後は調査対象者を増

やして所属チームによるエゴグラムのパターンを利用して，個別に見た選手の性格・行動パターンの変化を明らかにしていく予定である。

Ⅳ．まとめ

慶應義塾大学体育会ソッカー部員を対象に性格・行動パターンを客観的な指標としてとらえるエゴグラムを用いて，平成14年度のおけるクラブ活動によってどのような変化が見られるのか調査した。その結果，次のことが明らかになった。

1．Aチームのエゴグラムは逆N字型を示し，シーズン前・後で変化が見られなかった。
2．BチームのエゴグラムはFC優位型を示し，シーズン前・後変化が見られなかった。
3．学生スタッフのシーズン前のエゴグラム・パターンはNP低位型を示し，シーズン後のパターンはCP，NP，A，FCのポイントが上昇し，FCが低くなった。

本研究は平成14年度慶應義塾大学学事振興基金の交付を受けた。

参考文献

落合勲（1998）エゴグラムによる競技スポーツ集団の研究ーラグビーの場合ー。信州短期大学創立10周年記念論文集，10：157-162。
岡村武彦，関純，澤村律子，寺嶋繁典，康純（1997）プロサッカー選手の性格をはかるーエゴグラムによる追跡調査ー。サッカー医・科学研究報告書，17：47-49
滝山将剛（1983）レスリング選手の性格特性（第4報）ー大学4年間のクラブ活動経験による変化についてー。国士舘大学体育学部紀要，9：17-22。
TEG（東大式エゴグラム）第2版検査用紙。金子書房。
東京大学医学部心療内科（1995）新版エゴグラム・パターンーTEG（東大式エゴグラム）第2版による性格分析。金子書房。